

彙報

中嶋敏先生を偲ぶ

斯波 義信

わが国の中国史研究における泰斗また最長老として、諸方面からの敬慕を一身に集めてこられた中嶋敏先生が、去る六月二十四日、九十七歳の長寿を全うされて、道山に帰された。中嶋先生は東京帝国大学入学とともに、中国経済史の開拓者であった加藤繁先生の薫陶を受けて学業生活に入られ、その加藤師に親近の高足として、衣鉢を直接に嗣がれた。先生はこのゆかりを終生大切にされていて、加藤先生の研究拠点であった財団法人東洋文庫の研究事業の推進に対しても、長期にわたって渾身の尽力を惜しまれず、また文庫をこよなく愛しつづけてこられた。これを思うとき、『東洋学報』のこの小文においては、中嶋先生と東洋文庫との関係を中心として、ご学業とご遺徳のあとを偲ぶことが適切と考える次第である。

先生は明治四十三年（一九一〇）一月九日、石川県石川郡松任町の教育家の家庭に誕生された。はからずも、この

年は東京帝国大学文学部に東洋史の学科が生まれた年である。父君の中嶋駿氏は石川県立農学校の教諭であった。母堂（旧姓直江）清女史は、金沢藩の由緒ある漢学家であり、代々家塾で講学していた直江氏号天明（先生の外曾祖父）、号菱舟（同外祖父）の家から中嶋家に嫁した。中嶋先生はその家伝の硯墨を身辺に秘蔵されており、漢学の素養においてすぐれた環境のなかに育たれた。まもなく父君が静岡県庁に転任するに伴って一家は静岡に居を移し、先生は旧制静岡高校文科乙類をへて、昭和五年（一九三〇）に帝国大学文学部東洋史学科に入学された。

恩師は池内宏教授（当時四十八歳）、和田清助教授（四十歳）、加藤繁助教授（五十四歳）であり、このころ和田・加藤両先生が隔年で〈東洋史概説〉を講じ、助手に志田不動磨氏、副手に松田寿男氏が、同期生には山本達郎氏、周藤吉之氏ら、一学年上に中山八郎氏および百瀬弘氏ら、四学年上に青山定雄氏などの諸賢がいた。同八年（一九三三）に卒業論文「北宋朝に於ける西夏との関係」をものされ、翌年大学院に入学して「北宋の対外関係——特に西夏問題に就いて」をテーマとされた。

加藤師は中国（私）経済史の解明に生涯の目標を置きつつ、これにはまず（公）財政史からその手がかりを求めることを考え、さらに財政史を究める基礎作業として貨幣史

に取り組む、という手順で研究をすすめていた。すでにその成果は、第二の名著、また博士学位取得の論文であった『唐宋時代に於ける金銀の研究——但しその貨幣的機能を中心として——』（上下冊、東洋文庫論叢第六、大正十四・十五年、一九二五、二六刊）を公表されて、帝国学士院恩賜賞（昭和二年、一九二七）を受賞された。当時、大学の特殊講義において秦漢から唐宋へと中国貨幣史を講じながら、公表論文では唐宋時代の商事の諸制度をつぎつぎに解き明かしていくという、円熟・綜合の境地に達していた。

加藤、和田の両先生は互いに肝胆相照らす仲であったように、加藤先生はすでに大正十二年（一九二三）、和田先生を誘って、慶應義塾の福田徳三博士の監修の下、帝国学士院の松方正義公爵記念奨学資金の援助をうけて歴代正史食貨志の訳註事業をはじめられ、片や和田先生はその翌年、東洋文庫に白鳥庫吉研究部長の下に八名の「研究員」が設けられてその主幹に就いたとき、この一員であった加藤先生を誘って文庫の研究機関誌『東洋学報』への投稿を促した。ついぞ昭和四年（一九二九）、外務省に属する東方化学院東京研究所が発足すると、加藤先生はその兼任研究員を委嘱されて、「支那古代貨幣の史的化学的研究」をテーマとして、道野鶴松助手を指導して、先秦、秦漢期の貨幣について、文献学研究ならびに成分化学・金相学分析を総

合的におこなった。この研究は中嶋先生が在学中の大学での講義にも用いられ、後年に遺稿を編集した『中国貨幣史研究』（東洋文庫論叢第五六、一九九〇）に収まっている。

昭和八年（一九三三）の卒業後、学友の周藤先生は池内宏教授の斡旋で朝鮮総督府の朝鮮史編修会嘱託となり、一方、中嶋先生は昭和九年（一九三四）、東方化学院東京研究所における加藤研究員の新たなテーマ「支那中世貨幣史の研究」の下で助手に採用された。同所には同期入所の研究員山本達郎氏が、また先任者に昭和五年（一九三〇）から市村瓊次郎研究員（テーマ「讀史方輿紀要地名索引の編纂」）の助手であった青山定雄氏がいた。昭和十四年（一九三九）、加藤先生が同所の研究員を退くと、中嶋先生はその後を承けて研究員となり、「遼金元貨幣史の研究」をテーマとされた。

助手時代の中嶋先生は、「西羌族をめぐる宋夏の抗争」歴史学研究一六（一九三四）、「西夏に於ける政局の推移と文化」東方学報・東京六（一九三六）、「西夏に於ける銅鉄銭の鑄造について」同上七（一九三六）を公表されたが、宋と西夏の抗争の背後に貨幣問題が潜むという加藤先生の示唆を承けた論考である。研究員時代には「支那に於ける湿式収銅の沿革——主として宋代の膽銅精錬に就いて」東洋学報二七—三（一九四〇）、ついで「支那に於ける湿式

収銅法の起源」『加藤博士還暦記念東洋史集説』（一九四一）、「北宋時代に於ける新鑄銭の状況と財庫」『社会経済史学』二一—三（一九四二）を公にされ、鑄銭技術史と文献学を併用するという斬新な分野で不動の地位を築かれた。同研究所には加藤先生が収集された中国の古銭、銭范の史料が多数あったが、中嶋先生はさらに加藤先生に依頼されて（現大田区）戸越にあった銭幣館（現日本橋の貨幣博物館）に通って宋代の小平銭（基本貨幣）の重量・成分を逐一詳細に検証された。

さて、東洋文庫において、加藤・和田両先生が監修者となり、門下の若手中国経済史家をひきいて「歴代正史食貨志訳註」の研究会を正式に発足させたのは、昭和十八年（一九四三）のことである。中嶋先生はその構成メンバー、しかも事実上の幹事役に当たられ、各人がそれぞれの分担をもつなかで、『宋史』の錢幣篇の訳註を担当された。この間に、加藤先生は昭和十一年（一九三六）に東大の教授となり、十六年（一九四二）に退官された。加藤先生の手許にはかつて『商学研究』誌に寄せていた数種の正史食貨志の訳註稿があつて、これらが昭和十七年（一九四二）『史記平準書・漢書食貨志（訳註）』（岩波書店、岩波文庫）、ついで（遺稿）『旧唐書食貨志』（同、一九四八）として刊行されるが、ともに註記部分の原稿における引用文照合と

校訂は中嶋先生が行った。時に退官後の加藤先生は、和田先生の薦めで自らの論集を編む作業に入られた。ここでも中嶋先生は病弱気味であつた師を助けて成稿の校訂に当たり、ほぼ完了に達していた。その傍ら、和田先生が『支那官制発達史（上）』（中華民國法制研究会、一九四二）を編んだとき、中嶋先生はその宋代の部分を分担した。該博な知識を簡潔平易な概説体で説く中嶋先生の後年の文体は、けだし和田先生ゆずりのものであらう。こうして、両師とのかかわりは東洋文庫を通じて深くなつていった。

そこに訪れた敗戦の大打撃は、東洋文庫の存立そのものを危うくし、また営々と築かれてきた学問伝統の存続にも未曾有の試練を課した。残念にも終戦翌年の昭和二十一年（一九四六）の一月、加藤先生は病で逝去された。当時研究部長として文庫の研究事業の継続・復活に日夜献身していた和田先生は、余暇を見いだして中嶋先生の職場を探す労をとられたと聞いている。その幹旋もあつてか、中嶋先生は同年、東京高等師範学校に奉職され、やがて二十四年（一九四九）、これを母体に東京教育大学が新設されるとその文学部助教授に移られ、以後、教授、文学部長を歴任されて、四十八年（一九七三）に退官されるまでの二十五年間、その溢れる情熱を東洋史研究の後継者の育成に注がれ、数多くの俊秀を門下に育成された。

このころ和田先生が企画された諸事業のなかに、懸案であった故加藤先生の論集の公刊と、「歴代正史食貨志記註」の推進があった。前者は『支那經濟史考証』上下巻と題して、正篇三七、附録五篇の遺稿を選集し、ほか小伝、年譜、著作目録、索引を附し、和田先生を監修者に、和田清、青山定雄、榎一雄、周藤吉之、中嶋敏、中山八郎、西嶋定生氏を編集委員に、東洋文庫論叢三四上下として昭和二十七年（一九五二・五三）に成った。稿本の整理と引用文の照合、校正は全体を五類に分けて、中嶋敏、周藤吉之、青山定雄、中山八郎、西嶋定生の諸氏が担当し、上下巻とも巻末の「あとがき」には中嶋先生の筆による収載各論考の解説を付した。この周到に準備された論集公刊の挙は、まだ物情騒然の余韻のつづく当時であって、戦前からの斯学の健在と到達水準を内外に知らしめ、後進世代を励ます大きな刺激利となったことはいままでもない。

後者の「歴代食貨志記註」は、昭和十八年にはじまり、終戦を挟んでいったん中断していた右の研究会を再生させるだけでなく、文庫の東洋史論叢の刊行計画のなかに織り込んで、成果のできるだけ早期の公表を期するものであった。和田先生が監修（編集）者としてこの事業をリードし、『明史食貨志記註』（論叢四〇）が昭和三十二年（一九五七）に成り、ついで『宋史食貨志記註（一）』（論叢四四）が昭

和三十五年（一九六〇）に公刊されたが、その三年後の昭和三十八年（一九六三）、和田先生は病を得て逝去された。『宋史食貨志』は歴代正史食貨志のなかでも格別に大部な巨編であるだけに、その記註全編の完結は事業を遂行する上での山場として残された。中嶋先生は加藤・和田先生を継ぐ三代目の監修者を引き受けられた。この校訂と訓読と註解を綜合する地味で丹念な事業は、それだけに各分担者にとって長期の労力の投入を要した。その一方、東洋文庫論叢シリーズの出版計画のなかで発足した以上、続編の公刊は江湖の期待の集まる場所である。これ以後、中嶋先生の監修者としての苦心は並々ならぬものであった。

中嶋先生がこの難事業の衝に当たられるに先立ち、東洋文庫の研究事業は昭和二十八年（一九五三）から、文部省あるいは外国からの各種助成金を申請して研究に当たり、その成果を逐次刊行していくという、戦前とは異なる新体制に入っていた。このためにはプロジェクトチームとプログラムを組むことになる。昭和二十九年（一九五四）、フランスのE・バラシユ教授が提唱して『宋史提要』を編纂するための国際学術協力事業、すなわち「宋史研究計画」がおこると、翌年東洋文庫内に日本の宋史提要編纂協力委員会がおかれ、研究員の青山定雄（主宰者）、周藤吉之、中嶋敏の諸先生は常務委員に列して諸般の業務を統括する

ことになり、「宋代史研究室」が創設された。同研究室の成果として「宋代研究文献目録」(一九五七)、「宋代研究文献提要」(一九六二)、「宋代史年表(北宋)」(一九六七)、「同(南宋)」(一九七四)、「宋人伝記索引」(一九六八)、「宋会要研究備要」(一九七〇)、「宋会要食貨索引(人名・書名篇)」(一九八二)、「同(年月日・詔勅篇)」(一九八五)、「同(職官篇)」(一九九五)を陸続と公刊した。この間、主宰者の青山先生は昭和五十八年(一九八三)に逝去され、文庫内の宋代史研究室の事業運営もまた、中嶋先生の双肩にかかることになった。

この昭和五十八年、中嶋先生はかねて昭和三十七年(一九六二)から、門弟諸氏一〇余名に請われるまま、講読会の形式をとって文庫外でつづけてきた『宋史選舉志』全六巻に対する研究会の場を、東洋文庫内に移して宋史選舉志研究会と名付けて、同書の訳註を東洋文庫論叢として刊行する計画を具体化された。この新事業は順調に推移して、中嶋先生を編者とする『宋史選舉志訳註(一)』(東洋文庫論叢五七、一九九一)、『同(二)』(同五八、一九九五)、『同(三)』(同六一、一九九九)として完結をみた。また昭和六十一年(一九八六)、東方学会においてその英文誌 ACTA ASIATICA の五〇号に、宋代の官僚制・士人文化について論ずる特別企画があり、先生はその編集を担当し

て序文を寄せるとともに、梅原郁、近藤一成、渡辺絃良、荒木敏一、長谷川誠夫の諸氏の論考を収載した。この前後の先生の学問関心が、加藤師の貨幣史・財政史研究を深めるにとどまらず、政治・官僚文化の究明から典籍・文献の学を包含するものへと広がりがつづあったことを裏書きしている。

選舉志訳註の挙が円滑に進んでいたころ、『宋史食貨志訳註』の編纂体制を立て直して、『同(二)』以下の続編を完結させるといふ企画が、中嶋、周藤、藤井宏、中村治兵衛、河上光一の諸先生の間で議され、昭和六十一年(一九八六)からこれがスタートした。しかし、間もなく周藤、中村、藤井、河上の諸先生が、各自の成稿の完了ないしは未了のうちに相次いで逝去されるという思わぬ不幸が訪れた。中嶋先生はこれに対処して、亡くなられた訳註者に代わる新規の分担者を選定して、各原稿の整序・補完を委嘱した。こうした曲折のなから、『宋史食貨志訳註(二)』(東洋文庫論叢五九、一九九九)、『同(三)』(同六〇、一九九九)、『同(四)』(同六二、二〇〇二)、『同(五)』(同六三、二〇〇四)、『同(六)』(同六四、二〇〇六)と逐次公刊され、昭和十八年から数えて実に七四年を費やし、三・四世代にわたる研究者を動員した事業はここに完了した。中嶋先生のためまぬ腐心・情熱、一貫したリーダーシッ

ブがなかったならば、この事業は挫折していたかもしれない。先生が健勝であられたときに最後の第六巻を捧げ、通覧していただくことができたのは、薰陶を受けた一同の幸福とすべきである。なお、第四巻は先生のご専門分野にもつとも関連するが、先生は〈會計〉篇、〈錢幣〉篇の訳註を親しく作成され、他の各巻についても、定期開催の研究会には高齢にもかかわらず毎回臨席されて、助言を与え誤りを正し、成稿にも一々目を通す労を惜しまれなかった。

東洋文庫における中嶋先生は、昭和三十五年（一九六〇）、宋史提要編纂協力委員会の常務委員となり、同年、兼任研究員を委嘱された。後に昭和五十八年（一九八三）に青山定雄先生を嗣いで宋代史研究室の主宰者に任じ、この分野

にかかわる研究事業の推進に抜群の成果をもたらした。また昭和五十二年（一九七七）からは東洋文庫の東洋学連絡委員を委嘱されて、研究業務の顧問、国内東洋学機関との連携の任に当たられ、昭和五十六年（一九八一）からは評議員に就任され、平成十三年（二〇〇一）に退任されるまでの足かけ二十一年間、評議員会にはほぼ常時出席して文庫の運営を助けてこられ、文庫の現在・未来の成長に対して、つねに暖かい声援を送ってやまれなかった。ここに中嶋先生のご鴻恩に深甚の感謝を捧げ、ご冥福をお祈りする次第である。

了